

<書評>

齊藤美野

『近代日本の翻訳文化と日本語—

翻訳王森田思軒の功績』

(ミネルヴァ書房 2012, 276 ページ)

ISBN 9784623064465

評者 柳父 章



黒船以後、西洋文化が圧倒的に到来した時代、翻訳はこの時代の文化活動の花形だった。森田思軒はその当時「翻訳王」と謳われていたのだが、その後今日まで、その功績が注目されることは意外に少なかったようである。本書はその思軒の文筆活動を、近代日本の言語文化史の背景から照らし出して見せている。

近代の初期、翻訳はたとえば『花柳春話』のように豪傑訳とも言われた大ざっぱな翻訳が横行していた。そして、やがて明治二十年の頃以後、原書の文章を忠実に追っていく翻訳が現れ始めた。齊藤は、これをシュライアーマハーの用語を借りて「起点テキスト志向」の翻訳と言っている。思軒はこの時代の中心人物だった。齊藤は思軒の文章を精密に分析しているが、なかでも、『探偵ユーベル』という小説の翻訳を取り上げて考察している。このことを、私はここで注目したい。

思軒は一般には『十五少年漂流記』や『八十日間世界一周』のような冒険科学読み物の翻訳者として知られているが、ここで齊藤が取り上げている『探偵ユーベル』は、これらとは全く趣を異にした作品である。

フランス革命の後、政権は保守化して、リベラルな知識人たちは迫害され、辺鄙な村に集まって反体制の時機を窺っていた。原著者ユーゴーもその中の一人だった。時の政権は彼らを危険分子と見て、スパイとしてユーベルをここに送り込んできた、という筋書きになっている。この小説の主人公となるユーベルは、平凡な下級役人である。ユーゴーは、この平凡な男を小説の主人公として描き出した。悲しみ、喜び、悩む内面を持った一個人を描き出そうとしたのである。—それは、まさしく近代小説の中心テーマの始まりであった。

現代フランスの文芸評論家ロラン・バルトは、近代小説の特徴を、その文体面から捉えて、三人称代名詞と、物語の過去形が重要であると指摘している。旧時代の英雄豪傑美女中心の小説に代わって、どこにでもいる無名の人間が、個人として尊重されるようになった時代の

YANABU Akira, "Book Review: Translation Culture of Modern Japan and the Japanese Language: Contributions of Morita Shiken, the King of Translation," *Interpreting and Translation Studies*, No.13, 2013. pages 148-149. © by the Japan Association for Interpreting and Translation Studies

背景を鋭くとらえた批評である。

ユーゴーのヒューマニストとしての着眼は、このユーベルを主人公として描いていた。そして、遠い日本の森田思軒は、近代の始め、混沌と到来した舶来文化の中から、その西洋先進思想の核心を鋭く感じ取って、この小説を日本に紹介していたのである。

斉藤は、この「ユーベル」を研究の対象に据えた。小説の思想内容にはほとんど触れていないが、その文体については、精密に分析している。中でも注目されるのは、文章で多用されている人称代名詞の考察である。一人称代名詞が「余」などで、また三人称代名詞が「彼」などで多く翻訳されていることを指摘している。

これ以前、日本語の文章でおよそ人称代名詞が用いられるのはきわめて稀だった。自己主張は文章でも嫌われる伝統文化があった。とりわけ日本語に三人称代名詞は存在していなかった。「彼」とか「彼女」という言葉は、この頃以後、翻訳を通じて日本語の中に造られたのである。とくに、近代以後の小説で、「彼」は新時代の個人主義的な小説世界の中心人物を語る言葉となり、やがて白樺派などに継承されていった。

思軒の活躍していた同じ時代に、森鷗外、二葉亭四迷、尾崎紅葉なども翻訳を始めていた。そして鷗外、四迷、紅葉たちは、やがて西洋文学の翻訳を通じて学んだ文体の技法で、日本語の小説を書くようになり、人称代名詞は盛んに使われ、その成果は、近代日本文学の夜明けとして評価されるようになっていく。思軒は、しかし小説は書いていなかった。それは、彼の翻訳活動の時期が十年ほどで短く、惜しくも三十六歳で夭折したせいであったかも知れない。

この時代、翻訳を手がけた人たちのうちでも、思軒は「翻訳王」とも言われたように、その活動の中心にいたのだが、その割に後世の評価があまり高くないのは、そのせいではあるまいか。

つまり、思軒は、近代日本文学発展の直前の段階までを準備し、そこで終わっていたのである。鷗外、四迷、紅葉たちは、その段階から一歩先へ、創作文芸の方向へ踏み出していったのだ。

.....
【著者紹介】

柳父章 (YANABU Akira) 評論家。日本通訳翻訳学会評議員。
.....

